



Air

Miki Hirose +
Mayuko Katakeura

Days
of
Delight

Air

広瀬未来+片倉真由子

Miki Hirose trumpet

Mayuko Katakura piano

at TARO's Atelier

1. Embraceable You (G.Gershwin)
2. Body and Soul (J.Green)
3. Days of Wine and Roses (H.Mancini)
4. Spartacus Love Theme (A.North)
5. Sunlight (M.Hirose)
6. The Nearness of You (H.Carmichael)
7. Blues for TARO (M.Hirose)
8. Invitation (B.Kaper)
9. Air (M.Hirose)

Produced by Akiomi Hirano

Recorded at Taro Okamoto Memorial Museum on 20 April 2021
Recorded & Mixed by Takahiro Koizumi
Mastered by Masahiro Tabayashi at Nippon Columbia Studio

Art Direction & Design : Hiroshi Kurisaki
Cover Art : Taro Okamoto
Photograph : Takeo Hibino

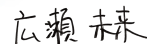
Special Thanks : Taro Okamoto Memorial Foundation

音楽家として心から尊敬する広瀬未来とともに、
世界にひとつの特別な、そしてわたしの大好きな
空間で作品を創ることができて、とても幸せです。
ふたりの音楽が多くのおみなさまのもとに届きますように。



Mayuko Katakura

録音当日の朝、太郎さんのアトリエに入った瞬間に感じた
新鮮な感動をいまでも忘れることができません。
いろいろなレコーディングを経験してきたけれど、
こんなにリラックスして緊張らず演奏できたのははじめてです。
素晴らしい演奏をとおしてぼくを自由してくれた
片倉真由子さんに心から感謝します。



Miki Hirose



対等であること、自由であること、シンプルであること

2020年3月16日。ぼくは四谷のスタジオで至福の時を過ごしていました。待ちに待った広瀬未来のレコーディングで、クインテットの面々が出色のパフォーマンスを繰り広げていたからです。

広瀬未来(tp)、山口真文(ts)、片倉真由子(p)、中林薫平(b)、山田玲(ds)という、日本ジャズ界きってのアスリートたちが繰り出すサウンドはじつにエキサイティング。相性も抜群で、ほとんどワンテイクで気持ちよく進んでいきます。その様子をコントロールルームで見ていたぼくがどれほど楽しかったか、きっとご想像いただけることでしょう。

あっという間に予定楽曲の収録が終わり、彼らが笑顔でヘッドフォンを外そうとしたとき、ぼくは咄嗟にマイクのスイッチを入れました。「まちがいに素晴らしいアルバムになる」という確信とともに、「あと少しだけ余韻を楽しみたい」との思いが込みあげてきたのです。

「ちょっと待って!」と声をかけた瞬間、ひとつのアイデアが降りてきました。広瀬未来と片倉真由子がふたりで奏でるごく短いエピソードが、アルバムの最後を飾るというものです。「エンディングらしく穏やかな感じで。尺は1~2分くらい」。マイク越しにそう話すと、ブース内の広瀬未来がそのまま「酒とバラの日々」のテーマを吹きはじめました。やさしく語りかけるようなトランペットと、それにゆったりと応えるピアノ。わずか95秒の即興演奏。こうして「The Golden Mask」(DOD-008)は最後のピースを手に入れます。

じつに印象深い経験でした。それはふたりもおなじだったようで、2021年4月にデュオのツアーが企画されます。広瀬未来からプランを聞いたぼくは、その場でツアー直後のレコーディングをオファーしました。単純に「あのサウンドをもっと聴きたい」と思ったし、「ふたりの対話をきちんと記録するべきだ」と考えたからです。

岡本太郎のアトリエで録ることを即断したのは、この場所で土岐英史と片倉真由子のデュオアルバム「After Dark」(DOD-004)を制作した経験からでした。天井が高く、壁いっぱいの油絵

が吸音材の役割を果たす環境が、収録に適した音響特性を備えていることに加えて、太郎の気配が生々しく残る非日常の空間が、ミュージシャンたちの精神にクリエイティブな刺激を与えるらしいのです。

しかも太郎が愛用したピアノと片倉真由子の相性がじつに良く、彼女の手にかかると100年前の“骨董品”がやさしい音で生き生きと鳴る。結果、レコーディングスタジオとは異なるほのぼのとした空気が立ち現れ、デュオに相応しい体温を感じるサウンドになるのです。

いま思えば、ぼくはこの場所で広瀬未来の“歌”が聴きたかったのかもしれない。

ピアノを相方にしたデュオは、管楽器の歌心をもっともビュアに引き出す編成です。じっさいここでの広瀬未来は、自然に、無心に、心から歌っています。なんのてらも演出もなく、まるで無意識に鼻歌を歌っているかのように、心から歌を楽しんでいる。それがわかるから、こちらも楽しくなる。

なにより彼は“声”がいい。鋭利なのに分厚く、軽やかなのに深い。多彩な表現を可能にするその艶やかな音色は、日本ジャズ界随一でしょう。

心に刺さる“声”をもつ広瀬未来が、心から楽しんで口ずさむ“歌”。それをじっくり聴くのに最適な形式がピアノとのデュオであり、その相方として最上のピアニストが片倉真由子だと考えたのです。

レコーディングを2日後に控えたツアー最終日。御茶ノ水の老舗〈NARU〉でふたりを聴いたぼくは上機嫌でした。演奏が素晴らしかっただけでなく、いい意味で予想を覆されたからです。

ふたりのデュオをあのとときの“酒バラ”しか聴いていないぼくは、リビングで語らうような寛いだ雰囲気を感じていたのだけれど、ステージ上で紡ぎ出されていたのは、スピード感とテンションに満ちたスリリングなサウンド。高い集中力を持続させることでしか得られない、高度な抑制とシンプルネスが音楽全体を統制していました。

この上質な緊張感はどこから来るんだろう？ そう考えはじめてすぐに気づいたのは、ふたり

の関係がフラットであること。主従がないのです。

デュオなんだから当たり前だろ？ そう思われるかもしれませんが。しかし往々にして、とりわけ管楽器とピアノの組み合わせでは、いつの間にか“管がメインで、ピアノは伴奏”という役割回りになります。

ところがこのふたりの場合、音楽がどう展開していこうと、関係はどこまでも対等なまま。互いになにも強要しないし、相手との距離を自在にコントロールしている。その結果、ともに自由になって、それぞれの持ち味がナチュラルに滲み出る。

このあたりの事情を片倉真由子はこう言います。「相手によっては、たしかに伴奏に近い演奏になることもあります。そうしてくれと言われるからではなく、無意識のうちにそうするほうがサウンドすると感じるからです。でも彼とはそうならない。おなじポジションで併走しているように感じるから。一緒につくりあげていく感覚になるんです」。

そういうとき、相手のなにを見ているの？ そう問うと、「描こうとしているストーリーみたいなものかな。それを感じながら、どんなアプローチがいちばんサウンドするかを判断します」と答えたとに、こうつけました。

「彼はいっさい指示しません。だから、わたしのアプローチがイメージとちがっているかもしれない。たとえそうだったとしても、彼はそれを問題とせず、“あ、そう、じゃ、そこからどうする？”って。すごいと思うのは、音楽がどんな方向に行こうと、自分の信念やスタイルが崩れないこと。形は変わっても、彼自身はなにも変わらない。変わらないままジャストするんです」。

共演者に音楽的なフリーハンドを保証し、それぞれが瞬間のインスピレーションのままに、つまりは“そのときの自分”に正直に演奏できる状況をつくる。なにも言わず、すべてを任せる。それが広瀬未来の流儀です。

「ぼく自身、細かく言われるのがイヤなんです。言われればもちろんやりますけど、演奏は

けっして良くならない。そんなことしたって、なにもいいことないんですよ、インプロヴィゼーションの音楽なんやから。それぞれが思うことをやって、それで合わへんかったら合わへんでしょうがない」

この潔さこそ広瀬未来の真骨頂であり、唇がバテることを恐れず全力で吹きつづける姿勢とも通底するジャズマンとしての矜持なのだとほくは思います。

一般にトランペッターは、生命線である唇を守るために力を加減しながらステージをこなすのですが、彼はけっしてそうしません。とうぜんバテる日もあるけれど、そのときは深く倒れることを覚悟のうえで、つねにフルロットルでアクセラを踏みつづけるのです。

そしてもうひとつ。片倉真由子が興味深い話をしてくれました。

「一緒にツアーを回り、彼のジャズ観とプレイヤーとしての気概に心から共感しました。ジャズにとってなにが大事なのか。それをプレイで思い出させてくれたんです。口ではなにひとつ言わないけれど、音でバン!って示してくれた」。

フラット、自由、ナチュラル…。要するに、広瀬未来は“シンプル”なのです。

シンプルとは優先順位がはっきりしていて、迷いがないこと。なにがいちばん大切なのか、本質はなにかがくっきりと見えている。だから小賢しい計算をしたり、保険を掛けたりする必要がない。

このシンプルネスこそが広瀬未来のダイナミズムの力源であり、それはそのまま片倉真由子の強度の源泉でもあります。ふたりはともに小細工や自己演出を嫌い、徹底して“スジ”をとおす。

ふたりの対話が宿す上質な緊張感の底流にあるのはこの演奏哲学である。それがぼくの結論です。

平野 暁臣 (Days of Delight)
Founder / Producer